北川冬彦著

詩集

蛇

詩集 蛇

北川冬彦著

北川冬彦著

詩集

蛇

詩集 蛇

北川冬彦著

北川冬彦著

詩集

蛇

詩集　蛇

北川冬彦著

北川冬彦著

爐詩叢書
第三輯

蛇

發兌 爐書房

蛇

詩

「あいつの詩には、近ごろ新しさや鋭さがなくなつたね・」

「新しさや鋭さばかりが、美ぢやないだろ。頽げ山の美は君には判らないかね。あの丸味は、のつけからあるんぢやないんだぜ。とつこつたる山の幾千年幾万年ののちの姿なんだぜ。

ごつごつした梅の老木。みんな長い歳月を生きて身につけた美なんだよ。」

どんぐりの實

七才の息子が、どんぐりの實をポケットに一杯膨らませて、一つ二つづつ庭石につまみ出しては、下駄で踏みにぢつてゐる。

「もつたいないことをするな。」

「幾らでもおつこつてるんだよ。」

息子の案内で行つて見ると、意外にも宿の脇の、日ごろ出入りには目じるしとして親しい一本の空を摩す大木であつた。

折からの一陣の風に、物置のトタン屋根をめくら打ちにし、私達の頭の上にもバラバラと落ちてきた。足元を見れば、一面にどんぐりは落ち敷いてゐる。

默つて拾ひ始めると、

「どうするの？」と息子は怪訝な顔付である。

「何にも食べるものがなくなつたら食べるんだ。」冗談とも眞面目ともつかない調子で私が云ふと、

「お母ちやんが、どんぐり食べると馬鹿になるから食べちやいけないつて云つたよ。」と詰るやうに云ふ。

「仕方がないさ、何にも食べるものがなくなつたら。」

「馬鹿になつてもいいの？」

「うん」

私がなほも拾ひつづけると、息子も一緒になつて熱心に拾ひ出した。

「馬鹿になつてもいいんだね、何も食べるものがなくなつたら。馬鹿になつて

もいいやね。何も食べるものがなくなつたら。」と歌ふやうな調子で云ひながら。

あたりは薄暗くなつてきた。私は妙に物悲しくなつて、

「配給の粉にだつて、どんぐりの粉が這入つてるんだよ。」と云ふと、可愛い聲がして、

「どうりで、このごろ皆お馬鹿になつちやつたのね。」

私はびつくりして拾ふ手を休め、頭を上げると、目の前にいつの間にか十才になる隣りの女の子がニコリともせず立つてゐた。

生

荒れ果てた一軒家に私は狂つた妻と住んでゐた。

妻は、突然、「あなたのおとうさんがゐらつしやる、おかわいさうだわ、アレアレあんな一本橋でおつこちさうよ、あたし行つてあげなくちや。」と云つて、起き上らうとする。不思議な力だ。私は漸く全身の力で押し伏せた。

「放して。放して。」と叫び續けたが、そのうち、くたりと昏睡狀態に陷つた。

私の知人の僧侶が尋ねてきた。彼女は、床の上にきちんとかしこまり、「いらつしやいまし。」と可嚀にお辭儀をしたが、さつと顔色が變つたと思ふと、寢

巻の袖から細い片腕をすらりと抜くやうに出し、斜向いたツルツルの頭を、つるりつるりと撫で廻はした。そして、カッと目をむいて、「クソ坊主、歸へれ！」と喚鳴つた。この世のものと思へない美しい聲して。

夜、暗い野原に電報配達のであらう、懷中電燈がちらちらした。「ア、あたしのお迎へだわ。」と走り出した。押へる暇もない。キリストならぬ私の妻は、虛空を踏んで緣側から、どうと落ち氣を失つた。

家の裏では、鼬鼠が驅け廻はり、栗林が新綠の芽をいよいよ繁らせてゐた。

妻は、長男を生み落すと、ケロリとして狂氣は去つた。

長男は、その後子供ながら、まるで法律家のやうな堅固な頭腦力を示しつつある。

しかし、秘かに私は思ふ、「狂氣こそは、生の基盤をなすものではないか。人間いつ氣が狂ふか判つたものではない。」と。この想念は時に私を脅かし、何故だか時に私を深い安堵に包むことがある。

武州松山郊外

武藏野の原の蓋きるところ、山嶽地帶のスタート・ライン、丘が發生し始めるところ。頭に松の樹をしよぼしよぼ生やした硅藻土の岩山。露出した斜面。その岩山のつら。そのつらに、横穴が幾つも穿たれてゐる。百穴と云はれてゐるが百やそこらの數ではなささうだ。

これ等說では古墳說と穴居說と、二つに別れてゐると云ふ。穴居說は、斜面を這ひのぼり、穴に入つて見ると、穴居にしては少し低く狹い。一說には、初めクロボックルが住み、ついでアイヌが住んだのだから恰好なのだと云ふ。

穴の中には、一段と高くなつた寢台の面影を殘してゐる。岩質は硅藻土だから濕氣はない。この岩山の下には小川が流れてゐて、濯ぎ物や炊炊に使はれたに違ひないと云ふ。穴はいづれも土に覆はれてゐたが、蓋のやうな石を除くとぼろぼろに崩れる人骨が出たと云ふ。古墳說の根據だ。それに、こんな造りは古墳として方々にあると云ふ。鳥居龍藏博士も古墳說ださうだ。

私はとある一つの穴の中に橫はつて見た。遠望したとき、私には墓穴だなと印象されたけれど、考古學者ならぬ私は、燒け出されの私は、穴居說の方が身にしみる。

千年といふ歲月をへだてて、それは燒け跡の生活に近似してゐるからだ。燒け跡のバラックよりも立派な住居なのだ。

「こゝに、一ヶ月も籠つて見たい。何にも煩はされずに。仙人みたいに。」

私のあまりにも眞面目な顔付に、案内の土地の人は云つた。
「駄目ですよ。これは保存記念物なんで………。」

蛇

買ひ貯めた食ひ物がいよいよ殘り少くなり、妻と子供二人を田舍へやつてゐた盛夏の、或る晝のこと、大麥ばかりのとぎ汁を釜から、勾配のある庭先のささやかな菜園のトマトの根方に流し與へると、足元を、によろによろと蛇がのたくつた。胸がぐつと詰つた。蛇は私の苦手なのである。思はず、パッと一歩退いてゐた。

よく見ると、蛇は乾き固まつた土の上を勾配につれて流れ下つたとぎ汁から成つてゐた。その蛇は、瞬く間に土の下に滲み込み姿を隱した。

私は、ほつと吐て、大麥のこぼれ落ちさうになつてゐる釜を平に戻した。

愛情

捨て兒を、ミルクと穀粉で育ててゐるちよつと知り合ひの家がある。

その兒が、ひどい消化不良を起した。わたしの妻は、日に二度、おつぱいを與へに出掛けた。

吸ひ方がつよく、めまひがしさうになつて、歸つて來た日のこと、青い顔をかがやかせて妻は云ふ。

「あの兒、あたしがゆくと、につこり笑ふのよ。奥さんが、あなたには笑ひますのね、と妬ましさうに云ふのよ。」

また、

「うちの兒、あちらの奥さんがゐると、おとなでえんこしてゐるけど、見えないとあの兒の袖を引つ張つて、おつぱいをとり返へすのよ。」と妻は云ふ。

「可哀さうぢやないか。」

「えゝ。」

あちらの兒は生後五ヶ月。

こちらの兒は一年と二ヶ月。

「いい加減にしろよ。」と私は云つた。

こちらの兒は、しよつちゆう「うまうま」と云つてはお櫃の蓋をとつて、手づかみで、ムシヤムシヤやつてゐる。いままでにない非常な食慾である。

そのうち、こちらの兒も下痢をはじめ、むづかり出した。

「ぼんぼんが痛いのね。」と妻は云ふ。

「それ見ろ、いい加減に止したらどうだ。」
「いまさら止せませんわ。あの兒におつぱいをやりながら、これまで母親のおつぱいを一度も貰つたことないのね、こんどがはじめてなのね、と思ふと可哀さうで。」
「うちの兒はどうなるんだ。」
「仕方ありませんわ。」
「馬鹿！氣でも狂つたのか。止せ、けふかぎりで。」
「止せません。あなたのやうな冷酷な人だからそんなこと云へるのね。」
「何に云つてるんだ、止せつたら、止せ。」
眼に涙を浮べた妻は、默つて、わが兒を抱へ、小兒科の先生のところへ出掛けて行つた。全身を愛情のかたまりにしたうしろ姿で。

妻が疲れたまま、横になつてうたた寢してゐると、息子は、這つて行つて、妻の口をひとなめなめた。それから、胸を掻き分けおつぱいに吸ひついた。逆さの位置で、まるで犬の子のやうに。
離れて、食卓の上を、ひと掻き掻き廻はし、また這ひ寄つて、吸ひついた。
こんどは正常の位置で。やはり犬の子そつくりの感じで。

貝殼の花

この寒風の中で
斷崖の窪みに
よくも咲き出てゐる桃色の花、貝殼の花。
造花のやうな花花は
蕚をふるはせて
氷の破片と散る怒濤と、
健氣にもリズムを合はせてゐる。
（この荒々しいリズムに抗つてゐるのは

姿を見せない意地つ張りの海鳥だけだ）
浪の引き間に現はれる黑々とした巖。
その巖の上の
靡く青い海草。
何も見えない海と
冷い空の廣茫。

洞窟

薄暗い洞窟の奥で
その身の處置に迷ひためらつてゐる海水。
巖の裾に
泡は戯れ
水底に眠るともなく眠れる魚は
かすかに微かに搖れてゐる。
傍で
海草はなまめかしくその髮を梳けづり

生に醉ひ痴れてゐるかに見える。

原始のこゑ

私は
旅に寝て
隣りの女人の
物凄い鼾ごゑを聞いた。
夜蔭にひびくその聲は
ジャングルをふるはせて咆哮する
オラン・ウータンのこゑ　そつくりだ。
そのときの

寝台の宙に浮く思ひは
いま　渓流の囂々たる流れの音に
交はつて、
凝然と　私の身を固くさせた。

原始生活

マライの山奥に
人喰人種が
樹上生活をしてゐた。
私は罹災後
穴居生活をした。
私の怖れたのは
蚊群と豪雨。
人喰人種は

虎や豹。
人喰人種も私も
なりふり構はない。
同じだ。
私の息子は眞つ裸で
燒野の街を伸し歩いた。

秋を庖丁で裂くと

秋を庖丁で裂くと、
黄葉を手摑みにして
冬が
おそるおそる出てきた。

秋は
オールで切られた海水のやうに
すぐ傷口を

塞いでしまつた、
傷口を紅葉させて。
やがて雪白の衣裳を纏ふと、
冬は
見違へるやうな
自信に充ち充ちた姿となる、
額に凛凛と響くものがある。

二月の水蓮

その葉も莖もカサカサに枯れ、
氷にとざされてはもう何の感覺もない
悲傷の姿となり果てても
それに聯なる地下莖では、
春の新芽のために
やがて星や月と姸を競ふ開花のために
しづかに確實に
營みは、
時間のやうに進んでゐる。

一杯の茶

卓の上の茶碗に、急須からそそいだ一杯の茶が、いつの間にか、空になつてゐた、誰もゐないのに誰かが飲み干したやうに。

「何いつてらつしやるの。自分でお飲みになつたのに。」

冬の陽の溜つてゐる障子の、引手の棧のあたりからの聲である。

「え？」

私はびつくりして、きき返へしたがもう何も聞えない。ゆらゆら白いひかりが搖めくばかりだ。

殘骸

黄色や灰色や綠色の
玩具のやうに彩られた機体の殘骸、
われらの血税をくらつた怪物の成れの果て。
日の丸のしるしは
ばらばらに。
貨車から
材木のやうに抛り投げられ
馬車にうづ高く積まれてゆく、

こゝ川口の鑄物工場街、
これらは
鑄潰されて、
われらが日々の乏しい糧をかしぐ
家々の釜や鍋と甦り
新たなる生活を
苦澁に滿ちた生活を
營みはじめるのであらう。

風

不思議な一陣の風が吹いてゐた
風は
眼に見えない歡喜を運んでゐた
花々は　首をふりふり
馬の鬣は　しきりに靡いた
風はめように生まあたゝかく
人々は　呆然と大地にうち倒れた、
やがて

風は　ちぎれちぎれて
果て知れない沼の面（おもて）を渡り
それぞれ
白鳥らの羽がひの中で憩つた
白鳥らの羽がひの中で　遠い時間が死滅して行つた。

金庫

占領した町の
或る家の
階下の食堂に
大きな金庫が一個、据ゑられてあつた。
慾の皮の突つ張つた報道班員が
夜半に
それを、こつそりこぢ開けた。
轟音とともに

階上に寝てゐた者どもは
寝台から
跳ねころがされた。
驅け降りて見ると
そいつは
腹を破られ
飛び出した腹わたを
血まみれの手で
もとへ押し込まうと踠いてゐたさうである。
數時間、虫の息でゐたさうだが
事切れたことは云ふまでもない。

熊狩りのやうに

華僑の共産匪が
鐘乳洞の奥深く逃げこんでゐた。
彼等は
熊狩りのやうに
入口で生木を焚き
燻された。
ふらふらになつて出てきたところを
珠數つなぎにして連れて行かれ

眞暗な穴倉に押し込められた。
光を見るのは
一握りの餌が、投げ込まれるときだけだ。
眩しくて何も見えない
漸くもののあやめが見えだしたとき
扉がしまり、下される鍵の音を聞いた。

大樹

想像もつかない
何百年何千年經つたのか
高さも見上げるほどだが、
その葉の繁みの
巾はどうだ、
祭なんか
とつぷり這入つてしまふ、
だれもかも皆醉つてゐるので

樹の下だと思ふものはない、
曇り日とでも思つてゐるのだらう。
しかし
大船にのつて沖へ出たやうな
この心地は何だらう
風もないのに
大樹の繁みが
ゆらゆら搖れてゐるのを誰も知らないのだ。

行列の顔

背中ばかり見せてゐる行列は、
亂れずにすすんでゐた。
澄んだ川は
その底の白い砂に行列の影を映してゐた。
怪訝な顔付で眺めおろしてゐる並樹。
行列は亂れずにすすんだ。
そのうしろから
犬どもが群がつて續いた、吠え立てもせずに。

突然一匹が
まるで飼主でも嗅ぎつけたかのやうに
飛び出し、
一つの裾をくわへた。
その裾のぬしは
裾が千切れさうになつても振り返へりもしない。
犬は吠えた、
吠えるたびに
裾は犬の口から離れたが、
すぐ跳びかかつてくわへた。
すると背中ばかり見せてる行列が

一どきに顔を見せた。
ぎよつとさせる無表情な假面の顔なのだ。
どれもこれも同じ顔なのだ。
裾をくわへてゐた犬は云ふまでもなく
群がつてゐた犬どもは皆、
尻尾をダラリと垂れて
その場に居すくんでしまつた。

破壊と建設

「あいつは壊すことばかりしか、考へてないぢやないか•」
「壊さなくて、何の、新しいものが生れるかい。あの恰好のいい雲は、どうして出來たか。」

目次

詩 五
どんぐりの實 六
生 九
武州松山郊外 一二
蛇 一五
愛情 一六
貝殻の花 二〇
洞窟 二二
原始のころ 二四
原始生活 二六
秋を庖丁で裂くと 二八
二月の水蓮 三〇
一杯の茶 三一
殘骸 三二
風 三四
金庫 三六
熊狩りのやうに 三八
大樹 四〇
行列の顏 四二
破壊と建設 四五

装釘・細川幻華洞

爐詩叢書第三輯　蛇

昭和廿二年八月廿日印刷　昭和廿二年九月一日發行　著者
北川冬彦　發行者奈良縣高市郡八木町二〇二辻研　印刷者
奈良縣宇陀郡大字陀町西山一七八吉川富治郎　發行所奈良
縣高市郡八木町二〇二爐書房　日本出版協會員番號Ａ二一
八〇五九番　配給元東京都千代田區神田淡路町二ノ一日本
出版配給株式會社

頒價六十五円

9500

かんは

出版案内

人の生くるはパンのみに
よるに非ず

……新約マタイ傳……

爐書房

奈良縣高市郡八木町二〇二

月刊
詩誌

爐

◎高潔と純粋を日本に誇る詩徒必讀の詩書

頒價 一部 四円 年極 四十八円
旧号申込次第送付（送料共二円）

旧号執筆者

安西冬衛　高橋新吉　飛鳥敬
乾直恵　池田克己　右原厖
小野十三郎　岡崎清一郎　神西徹
北川冬彦　木水彌三郎　佐藤初夫
藏原伸二郎　吉川仁　笹澤美明
佐川英三　佐伯郁郎　田中冬二
瀧口武士　高橋サチ　塚本輝二
前田敦夫　永瀬清子　野長瀬正夫
日高てる　冬木康　村上成實
森本一三男　前川佐美雄　大江滿雄

爐書房

奈良縣高市郡八木町二〇二

豫約受付

爐詩叢書

限定版

第一輯　小野十三郎　抒情詩集　菊判・本文吉野紙・表紙厚紙・著者自裝

第二輯　永瀬清子　美しい國　菊判・本文和紙・装幀木版・山本遺太郎氏

第三輯　北川冬彦　蛇　四六倍判・本文洋紙・表紙厚紙

第四輯　飛鳥敬　壞れた噴水　四六判・右原彪裝幀

第五輯　瀧口武士　庭　四六判・本文洋紙・表紙軟質紙

第六輯　岡崎清一郎　菊面石　菊判・本文和紙厚紙

第七輯　日高てる　あわ雪のふる　菊判・本文洋紙・表紙厚紙

第八輯　藏原伸二郎　山果集　四六倍判・本文和紙・厚紙

第九輯　大江滿雄　二つの歌　大判・本文和紙

第十輯　森本一三男　鶴　四六判・本文洋紙・表紙軟質紙使用

第十一輯　乾直惠　題未定

第十二輯　高橋新吉　ほさけ

第十三輯　藤原定　題未定

…以下續刊…